

祭 葬 の 海

海の葬祭

ポケット文春 102

1962年9月10日 初版発行

定価 220円

著者 みな水 かみ上 つとむ勉 ©

発行者 小野詮造

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

海
の
葬
祭

長
篇
推
理

水
上
勉

文
藝
春
秋
新
社

海の葬祭・目次

第一章	断崖の村	5
第二章	銀紙と時計	28
第三章	背の高い男	50
第四章	奇妙な死体	73
第五章	二匹の鯛	95
第六章	車の行方	116
第七章	離れ家のボヤ	140
第八章	新しい死体	164
第九章	偽装と偽装	186
第十章	高槻まで	204
第十一章	海の葬祭	227

装幀・佐野繁次郎

第一章 断崖の村

1

昭和二十五年の八月はじめである。

福井県の敦賀市から、西へのびる若狭街道を、西にむかつて、三人づれの男女が急いでいる。男二人女一人、女といっても若い娘ではなかった。腰のまがりかけた老夫婦が、二十六、七のすらりとした背丈の若者を、両側からさしはさむようにして歩いていった。

道は白い砂ぼこりの舞いたつ登り坂であった。ところどころに古い松の木が植わっているが、真ひるの太陽は、いま、街道のその松影を点のようにちぢめていて、じりじり灼きつけるような暑さだった。

「えろう、暑いな。勘二郎さんや、足は痛うないかいな」

五十五、六の年ごろである。白い襦袢のような薄衣を、背中からびっしょり汗だくにした女が、皺くちやの浅黒いやせた顔に汗をうかべてそういった。背高い青年は、じっと空を見てい

るが何も物をいわない。

ずいぶん眼の澄んだ若者である。Yシャツに紺サージのズボンをはいている。若者は不思議なことに汗をかいていない。病身でもあるのか、蒼白い透けてみえるような肌をしている。鼻梁の高い奥眼のひきしまった容貌は、つれの老夫婦らしい男女と似ても似つかない都会風なかんじのする好男子であった。

「もうすぐや、もうすぐ家につく。ほら、もう、あすこに立石の岬がみえだしたがいな」

鬚面の男の方がそういう。その声には青年をなくさめるようなひびきがかもっている。この男も頬がこけていて、顎骨が出張っていた。老骨だった。みるからに肉体労働を経てきた六十近い百姓男である。男の声はイヤに耳の上から出てくるようなカン高い声で、あたりの静寂を破った。

「のどがかわいたな、おかね。どこぞに、川の音がせんかいな」

耳をすますようにして、ギラギラ光っている砂利石の舗装道路を眺めて、男は耳をすました。川の音はなかった。山峡は、鳴きしきる蟬の声ばかりである。

まもなく、杉並木がはずれはじめる。峠にさしかかった。そこから、三人のゆく手は右に折れ、海に突き出ている岬に向うのであるが、いま、その海は乳色にけむっていた。空の色と海の色は一つになって半紙を敷いたように動かない。

三人のほかには、この山道を通りかかる者はなかった。つい先程、材木を積んだトラックが

通りかかったが、そのトラックもぺたと焼けつくような街道の地面にタイヤをきしませながら過ぎると、暑い白い風景の中から消えていった。

三人だけしかない真夏の昼であった。

夫婦らしい百姓の二人は、相かわらず蒼白い顔の若者をはさんで白い道を急いでいったが、やがて、道が、樗や椎の大木の茂った木蔭にさしかかったとき、ほっとしたように足をゆるめて、

「いっぶくしようや、おかね、えろう足がつりよる」

そういうと、道ばたに倒れている皮をはいだ杉丸太を見つけて、寄って行き、へなへなと腰を下ろした。

「えろう、咽喉がかわく。若旦那、水がほしかろう」

若旦那といわれた青年は無表情にまだ空をみていた。

澄んだ眼は焦点をどこにしているのかわからないほど深い。よくみると、その眼はうるんだように心もちしめっているのだった。と、若者はその眼をうす桃色の瞼でゆっくり閉じたかと思うと、老婦に手をひかれたまま、木蔭に入ってゆく。

ちようどそのときであった。先程三人がのぼりつめてきた坂道に一台の黒塗りの自動車があらわれた。

「車がきよるなア。誰じゃろかのう」

かねとよばれた老婦が腰をのぼしてふりむいた。若者も、百姓も音のする方へ眼をむけた。と、車は陽に塗料を光らせながら埃を蹴ってつき進んできたとみるまに、杉丸太の上で若者をはさんで坐っている三人の前へくると、ギイギイとブレーキをきませて急停車した。

運転台には白い麻服をきた三十四、五の、眼鏡をかけた男がいた。男は、窓ガラスのノックを廻した。埃のついたガラスが緩慢に下降し、男はにゅっと顔を出した。

「丁字屋の若旦那ですか」車内の男がいった。

「へえな」

かねが眼をしばたたいて男を見てこたえた。

「左様ですけ、どなたさまで」

「旦那からことづかつてきました。若旦那は暑くてたいへんでっしょう。車に乗られませんか」

麻服の男はチラッと若者の方に視線をあてている。そうしてまぶしそうに眼をしかめて老夫婦をみやった。

「立石の神捨村へゆけばよろしんでしょうがな」といっている。

「おーきんな」

と、かねはまた声をはりあげて、脂汗の出た顔をつれの百姓男の方に向けた。

「そりゃ、ありがたいな。かね、そんなら、若旦那だけ、乗せていってもらうか」

「いいですとも。たのまれて来たんですからね。なに、二十分ほど突っ走ればすぐですわ」

男はちよつとぞんざいにいった。と、このとき、反対側の助手台から、また別の男がむっくり起きあがっている。車内に寝ていたのである。二十六、七のやせた男だった。彼は眠そうに眼をしばたたくと、ドアをあけて出た。うしろを廻って客席のドアをあけ、白いシーツの敷かれてある空いた坐席をとんとんと両手でたたくような仕草をして、若旦那といわれた青年が乗るのを待っていた。男はかすれ声でいった。

「その荷物も積んであげましょう」

「ありがたいなア」

鬚面の百姓は、顔をほころばせた。ポストンバッグと、大きな風呂敷包みである。暑い坂道を手こずってきたのであった。それを車で運んでもらえると思うと、嬉しかったにちがいない。

「えろ、そら、すんませんなア」

汗だくの皺くちやの顔を微笑させ、鬚面の百姓は、杉丸太の上に坐って、まだ動かない青年をふりかえった。

「さ、若旦那、そんでは乗せて行ってもらいなされ」

押すように、車の方へ青年をつれてゆく。ゴムの匂いとガソリンの匂いが鼻をつく。

「中は割れもんですかい」

と運転台の麻服がきいた。

「時計と銀紙ですわいな。この人の宝たからですわいな。大事に、村の家へ届けて下され。家にゃ、りえが待っとうりますで、荷イはりえにいうて下さればのう……」

「よろしいですよ」

とやせた男はいった。乗りしぶるような恰好でつつ立っている蒼白い顔の青年を、やせた男は車内に押しこんだ。

「そんならな、若旦那、村の家で待っとうて下され」

ぺこんと老夫婦は頭を下げたが、車内の青年の澄んだ眼はわずかにうごいただけである。

やせた男が助手台に廻った。ボタンと力強くドアが閉まった。と、エンジンがかかるのと、小石がはね飛ぶ音が同時であった。黒塗りの自動車は見る見るうちに木蔭をぬけ、白い海のみえる乾いた街道を、まるで、カブト虫のように麻畑の葉にかくれて見えなくなった。

老夫婦はいつまでも見送っていたが、

「えろう、親切な人じゃ、のうおかね」

ぽつんとつぶやいた。

蝉しぐれがはげしくなった。風のないじりじりするような暑さの山中である。やがて、二人の老男女は、自動車の消えた道をとぼとぼと歩きはじめた。

立石岬の神捨村は、日本海にのぞんだ崖にそうて、細長くのびている四十軒たらずの部落である。北に面して舟着場のつき出た海岸があるが磯は帯のようにせまい。ほんの二十メートルぐらいしかなかった。敦賀から、この村へ迂回して入りこんでくる道は、村にさしかかる頃から細くなり始めて、袋口のような入江にひっこんだ村へ下りるには、九十九折つづらおれになった坂道がつづいている。

その日の夕刻。村の端にある所ところ喜助の孫娘のりえは、帰りのおそい祖父母を待ちあぐねて峠まで出ていた。

勘二郎が敦賀からもどる日であった。りえは、薄化粧して一日じゆう、家の中で落ちつかない時間をもてあましていたのだが、たまりかねて山道まで出てきたのだった。

昏くれかけた崖の下のは、紫色に沈んでいた。海には波立ちはなかったが、磯近い礫石のあ
る岸辺では波打際が白い線になって光っていた。

りえは、十八である。喜助とかねの孫娘で、父母は満州に行つてまだ帰っていない。祖父母の家で大きくなった子供であるけれど、都会で生れた彼女は、面立ちも、めっきり発達してきていた。均整のとれた軀からだには大人おとなになった女の面影が出ていた。

りえは峠道を敦賀の山のみえる角まで登りつめた。海と山とが両面になつて分れて見える場所にくると大きく息をついた。りえは石ころ道のはなに立って、曲りくねつてゆく街道をみていた。と、遠くに喜助とかねの姿が見えた。しかし、彼女は顔いろをかげらせた。

「勘二郎さんはどうしたのやろ……」

りえは老夫婦の方に走り出した。十分ほど走り下りると、やがて、向うもりえをみとめて大声でいった。

「りえよ。若旦那は戻っておいでか」

りえは耳をうたぐった。

「知らん、勘二郎さんは来やせん」

「おかしいな。車が乗せてってくれたはずじゃ、大旦那からたのまれたというってじやった。そんなはずがなかる。午のひるはなしじゃ」

かねがびつくりしたような眼を喜助にむけている。

「おかしなこっちゃ、敦賀へもどったのかのう」

腑に落ちないことである。二人は走りよってくるりえの顔をまじまじとみつめた。次第にその顔は光りを失ってゆく。

「もどりやせん、勘二郎さんの姿は見えやせん。おじい、おばあ、どないしたん、勘二郎さんどこへやったん」

十八歳の少女は半泣きの顔を老夫婦にむけて叫ぶようにいった。

ひぐらしが啼いていた。娘の訴えるような声は、せり上った山壁の蟬の声とかさなって、暗いたそがれの海につきぬけていった。

敦賀市の繁華街、幸町の目抜きにあるデパート丁字屋の御曹子である境勘二郎が、誘拐されたという噂が市中にひろまったのはその翌日のことである。敦賀警察署刑事部の出井警部補の机上に、勘二郎の父親である丁字屋社長境平一郎からの失踪届が回付されてきたのは、その翌日である。すなわち八月十二日の朝であった。

出井警部補は、この届を読むとまず首をひねった。失踪した勘二郎は、精神薄弱症の病人であつたからである。年は二十七歳。丁字屋の跡取り息子とはいふ、市でも評判の白痴男であつた。そんな男を誘拐したのは、おそらく、境平一郎に対する面あてか、あるいは、よくある手口の脅迫にちがいない、と直感したのだ。書類をうけつけた責任者の巡査部長に出井はきいた。

「誰がこの書類をもつてきたのか」

「社長と、丁字屋の人事課長が二人で来ました」

「ほかに、何かいかなかったかね」

「勘二郎さんは、海水浴もかねて、立石の所喜助という老夫婦の家にあずけられにゆく途中の出来事だったそうです。老夫婦が、勘二郎さんをつれて、街道を歩いて、立石までゆく摺鉢山

の峠近くで、うしろからきた黒塗りの自動車につれ去られました。社長からことづかってきたといつて、勘二郎さんだけを乗せたそうです。立石の方角へ走っていったというんですがね」

「車の中にはどんな男がいたのか」

「麻服を着た三十四、五の男と、二十六、七のやせた若者がいたそうですが、老夫婦は社長の名が出たので安心して車にのせたといっているそうです」

「摺鉢山か。すると若狭へゆく道の二股道ちかくだな」

「そうですよ。粟野の山に向う峠ですからな。へんぴなあんなところで、……うまく計画された誘拐のような気がしますね。ところで主任、不思議なことに、社長宅へは、その男たちから何らの脅迫状も電話もありません」

「……？」

「白痴男を誘拐して何になりますかね。おかしく思いませんか。誘拐した方がいいが、手古ずつてしまつて、どこか海へでも追っぱり出しちゃえば大変ですよ。駐在所へ連絡して、いちおう、そこらあたりを調べるようには手配はしてありますが」

出井は巡査部長が汗をふきふき説明するのをききながら、二階の窓から見える海の方を眺めやつた。日本海は灰白色に今日もまた晴れている。

「海沿いの道をゆかないで、どうして、山道をとつたのかな」
と巡査部長がこのときぽつんとつぶやいた。

出井は永年警察官生活をしているが、白痴の男を誘拐したというような事件にはまだたずさわったことはなかった。誘拐事件は県下でも多々ある。例の東京で起きた三丸家の令嬢を誘拐した青年も、三丸家には何ら脅迫状などは出していない。ただ変質的な好奇心から令嬢を誘拐していた。似通ったケースはきかないでもない。しかし、境勘二郎は三十に近い白痴男であつた。脅迫につかわないで軀を目当てにつれていったとしたら、怨恨以外には、誘拐の動機は考えられなかった。

「自動車のナンバーはわからなかったのかね」

「はい。老夫婦は安心して乗せたものですから、全然、疑ってはいないのです。自動車のナンバーも、男たちの人相についても、至極あいまいで……」

と巡查部長は舌打ちした。警部補はタバコを取りだした。ゆっくり火をつけて、風の入りこんでくる窓に陽被いを落しにいった。と、またちょっと海の方をみている。

「こんな田舎町で、黒塗り自動車一台が追えないことはあるまい……」
にがりきつた顔で彼はいった。

「それで、捜査の今日までの報告は何もなかったのかね」

「地元の駐在の話と、丁字屋の話をかいつまんでみますと、十日の朝十時ごろに所喜助とかねは勘二郎をつれて敦賀を出ています。海べりを通らないで、栗野の方に出る山道から入って、木蔭を通って立石にぬけるつもりだったそうです。正午すぎに峠に出た模様です。そのとき、